

老人研 NEWS

No.244 2011.5

東京都健康長寿医療センター研究所(東京都老人総合研究所)

Index

フィンランドだより(後編)	1
外部評価委員会等	3
『50歳を過ぎたら「粗食」はやめなさい』	4
随想 宮沢賢治の二作品	5
職員の異動、平成23年度科学技術週間参加行事	6
新チームリーダー、サブリーダーの紹介	7
老年学公開講座予定、主なマスコミ報道	8



「外部評価委員会」
左：自然科学系、右：社会科学系(P.3参照)

「フィンランドだより」(後編)

今回は、私が滞在したタンペレ市の歴史と、私が専門としている福祉制度の研究をご紹介します。

タンペレ市の歴史

タンペレは労働者の町として栄えたこともあり、「フィンランドのナッシュビル」と呼ばれ、独特の方言があります。また、フィンランドの歴史にとって重要な地域であるとともに、多くの産業の集積地でもあります。携帯電話で世界的企業となった「ノキア」も、もとはこの地でゴム長靴を作っていた会社でした。

このような歴史的な背景からタンペレ市では、煉瓦造りの工場跡地を整備し、博物館やハンドクラフトの工房などに再利用しています。かつて、これらの煉瓦造りの工場跡地の利用はそれほど進んではいませんでした。しかし行政が一転して工場建造物の観光への利用を促進したことで、インパクトのある街のイメージを作り上げています。

さて、タンペレの歴史は、かつてフィンランドがスウェーデン領だった1779年にさかのぼります。当時の若きスウェーデン王であったグスタフ3世が、ナシ湖とピュハ湖という二つの巨大な湖に挟まれたタンメルコススキ川のほとりに村を作りました。スウェーデン語でタンメルフォシュ(Tammerfors)と呼ばれたこの村は、フィンランドがスウェーデンからロシアに割譲された後に、フィンランドの歴史にとって大変重要

福祉と生活ケア研究チーム 研究員 新名正弥

な役割を果たすこととなります。タンメルコススキ川では、巨大なナシ湖とピュハ湖の水位差を利用した水力を活用し、繊維、製紙産業がいち早く興りました。ちなみにタンペレは北欧で初めて電気が灯されたことでも知られています。地の利による水力の活用によって、多くの産業を擁する、いわば北欧の工場としての地位を確立していったのでした。フィンランドが独立を遂げたのは1917年。この独立は、1916年に起こったロシア革命によって実権を握ったレーニンの意向が大きかったといえます。フィンランドに亡命していたレーニンのかつての潜伏場所の一つであったというビルの一室は、レーニン博物館となっており、そこに展示されている文書や手紙などを通じてフィンランドとレーニンとの結びつきの強さを知ることができます。

独立直後、タンペレは悲劇に見舞われます。1918年に起こった内戦の激戦地となり、多くの血がこの地で流されることとなりました。内戦の後、タンペレ市には、兵士となった父親や家を失った戦争被災者のための住宅や孤児のための施設が作られるなど、内戦による対立への融和策が数多くとられました。そのような背景もあったのか、もともとヘルシンキに設立された社会科学大学が移転先を探している時に、タンペレ市は積極的に誘致活動を行い、今は総合大学となったタンペレ大学を誘致したのでした。

福祉制度の研究

それでは、私の専門とする福祉制度の研究について、タンペレ大学や北欧でどのような研究がされていたのか紹介しましょう。福祉国家として知られるフィンランドでは、法律によって、「高齢者の介護義務は地方自治体にある」と定められています。それ故、これまで高齢者の介護サービスは、地方自治体によって展開され、充実してきました。近年、我が日本でも進められている社会福祉分野の民間委託は、フィンランドの一部の地方自治体でも進行しており、私が滞在したタンペレ市は福祉サービスの民間委託の先進自治体の一つに挙げられています。地方自治体による福祉サービスの民間委託の背景には、急速な高齢者数の増加によるニーズへの対応、雇用の確保、地方自治体の財政問題などがあるようです。このような背景のもとで、タンペレ大学では、社会福祉分野への民間参入にかかわる研究として、福祉サービスの質の確保に関する研究、老年分野におけるソーシャルワークの役割やソーシャルワーカーの役割に関する研究が進められていました。その中で、近年フィンランドで最も重視されているのが、ソーシャルワークの倫理的側面に関する研究です。それは、福祉の民間委託が進み、ソーシャルワーカーやケアワーカーが民間部門とかかわることで、組織とクライアントのニーズの間に倫理的なジレンマが生じることがあるからだといえます。

民間部門と公共部門の関係についての研究

また、民間部門と公共部門の新たな関係を模索する研究プロジェクトも開始されました。タンペレ大学では、公共サービスのあり方にかんする学部横断的な研究組織が作られ、私は幸いにもその第一回目の研究会に参加することができました。フィンランドの民営化は日本と比較して、どのような状況なのでしょう。今回の滞在で分かったことの一つに、フィンランドでは介護に従事しているケアワーカーの賃金がそれほど下がらず、ケアワーカーの不足は大きな問題になって



タンペレ大学社会科学棟「リンナ」



午後1時、カレヴァ教会をのぞむ

いないことが挙げられます。その大きな要因は、ケアワーカーやソーシャルワーカーの報酬レベルが、所属事業者毎に決まるのではなく、民間や公的セクターを問わずに職種毎に全国一律で定められることだそうです。しかし、問題は、介護職員の養成が、社会のニーズに追いつかないことです。そこで、人材を確保するために、介護職員の養成段階で、専門的教育を縮小させて、幼児、児童、高齢者、障害者どの分野でも対応させ、介護職員の専門領域間の流動性を高める教育プログラムが施行されました。すると今度は質の確保が困難になりつつあるということが頻繁に報道されていました。

高齢者の貧困問題の研究

また、高齢者の貧困問題の研究も進行していました。フィンランドでも、サブプライムローン破綻による世界同時不況の影響と、公的部門の縮小によって社会階層間の格差が拡大しています。福祉国家では生活保障の基盤である公的扶助の水準が高いので、絶対的貧困の割合は低いものの、ある調査によると毎日3食をオートミールという、いわゆる「おかゆ」で済ますお年寄りが増えてきているということです。この結果は、高齢者世代内での格差が大きくなっていることを示しています。

今年のフィンランドの冬は、「百年に一度の寒さ」という触れ込みでした。その噂に違わず-25℃という、東京では経験できない寒さの中、自転車でドリフトしながら通勤をした日々が懐かしく思い起こされます。私は6ヶ月というまとまった期間の滞在中、フィンランド、スウェーデン、ノルウェーの北欧諸国の他、インド、モザンビーク、ガーナ、台湾の研究者とも議論を深めることができました。今回の研究の成果の一部はすでに台湾のシンポジウムや米国の学会で発表できました。在外研究に専念する貴重な機会をくださったタンペレ大学の同僚の皆さんと東京都健康長寿医療センターに感謝しつつ、フィンランド滞在手記を結びさせていただきます。

外部評価委員会(兼 研究進行管理報告会)の実施

平成23年3月、右記日程のとおり研究外部評価委員会(兼研究進行管理報告会)を開催いたしました。東京都健康長寿医療センターは、地方独立行政法人として発足してから2年が経過しようとしています。法人設立時に策定された中期計画は、平成21年度から平成24年度までの4年間と定められました。この中期計画に沿った研究活動をこの2年間、着実に進めてきたところです。

中期計画期間の後半に入る平成23年度には、早くも次期中期計画策定の準備に取りかかることとなり、この外部評価委員会で、委員の方から厳しく忌憚のないご意見をいただくとともに、専門的な立場からの評価をお願いいたしました。

3月11日に東日本を襲った震災の影響で外部委員の方の一部の方が欠席を余儀なくされたものの、自然科学系・社会科学系ともに予定時間を1時間以上も超

過するなど活発な質疑応答が行われました。

この委員の方々の貴重なご指導・ご意見を今後の研究計画策定の際に取り入れてまいります。

【実施日】

自然科学系：平成23年3月30日(水)

社会科学系：平成23年3月17日(木)

外部評価委員の構成：学識経験者 3名、都民代表1名、行政関係者1名 計5名

【評価実施状況】

各委員の方々には、事前に研究報告書等の資料をご覧いただき、当日は副所長、各研究部長がプレゼンテーション、その後質疑応答を行ないました。

今後、各委員の評価・ご意見を踏まえ評価結果報告を作成し公表する予定です。

種 別	外部評価委員 (○：委員長)		
	区 分	氏 名	役 職
自然科学系	学識経験者	新井 平伊	順天堂大学医学部・大学院医学研究科教授
	学識経験者	石井 直明	東海大学医学部専任教授
	学識経験者	下門顕太郎	○東京医科歯科大学大学院・歯医学総合研究科教授
	都民代表	小島 正美	毎日新聞社生活報道部編集委員
	行政関係者	中山 政昭	東京都福祉保健局高齢社会対策部施設調整担当部長
社会科学系	学識経験者	太田喜久子	慶応義塾大学看護医療学部部長
	学識経験者	長田 久雄	○桜美林大学大学院老年学研究科教授
	学識経験者	安村 誠司	福島県立医科大学医学部教授
	都民代表	本田麻由美	読売新聞東京本社記者(社会保障部)
	行政関係者	中山 政昭	東京都福祉保健局高齢社会対策部施設調整担当部長

「介護予防推進に向けた区市町村職員向けセミナー」

3月1日、板橋区立文化会館大会議室において、「介護予防推進に向けた区市町村職員向けセミナー」を開催いたしました。

これまで、研究所における研究成果を老年学公開講座等により一般都民等に向けて普及還元をしてきたところですが、今回は、介護予防や認知症予防を担当されている都内区市町村高齢者施策担当職員の方々を対象として、研究所の研究成果や取り組み状況を知っていただくために開催したものです。当日は、21区市32名の方々にお集まりいただきました。

はじめに、司会の高橋龍太郎副所長から介護予防事業の現状と課題についての話があり、続いて福祉と生活ケア研究チームの大淵修一研究副部長から「膝痛・

腰痛対策教室の運営」、社会参加と地域保健研究チームの新開省二研究部長から「高齢者長期縦断研究(TMIG-LISA)からわかった介護予防のエビデンス」、最後に「認知症になっても安心して暮らせる街づくり」ということで自立促進と介護予防研究チームの栗田圭一研究部長からお話がありました。

参加者からは、「もっとゆっくり聴きたかった」「一つ一つの講義の時間をもう少し延ばしてもらいたい」「資料が素晴らしいので、後でもう一度ゆっくり読みたい」「資料を後日区市町村に配って欲しい」等の声をいただきました。



新開部長の講演



『50歳を過ぎたら「粗食」はやめなさい!』

社会参加と地域保健研究チーム 研究部長 新開省二

3月、単行本を出版した(図)。高齢者が健康長寿をめざすなら「粗食」はやめるべきだと書いた。巷には夥しい数の健康本があるが、科学的根拠の乏しいものが少なくない。その中で、日本の高齢者を対象にした疫学研究に基づいて書いた本書は、「説得力がある!」ということで多くの読者を得ている。ここでは本の内容はさておき、今回の経験とそれを通じて抱いた活字文化衰退への懸念を述べたい。

◆ ◆ ◆

研究所で働く私たち研究員は、学術論文を通じて研究成果を公表することを主な業としている。出版社からのオファーがない限り、一般読者向けに本を書く機会はめったにない。今回も草思社という出版社から依頼がなければ書かなかったと思う。昨年6月、日経新聞夕刊に“高齢者、『配食』頼み一段と”という記事が載った。そこにあった私のコメントに興味をもった同社編集部の吉田充子さんから手紙が届いた。食を切り口にして高齢者が元気に生きていくすべを教えてくださいとあったが、私は理系人間で文筆は得意ではないので躊躇した。吉田さんは「理系(新開)と文系(ライター)が融合すれば、科学的なわかりやすい本ができます」とのこと、それ以降、私と吉田さん、ライターの二村高史さんの三人の共同作業が始まり、今年の1月末に執筆が完了した。

◆ ◆ ◆

私としては、これまでの研究成果を一般の方にわかりやすく紹介するいい機会と捉え、論文として発表していないデータも入れた。どんな読者層にどんなメッセージをキャッチしてもらうか、その意味で内容はもちろんだが、タイトル、帯、それに装丁も大切であることを知った。これらは出版社が力を入れた。「これまで数々のベストセラーを手がけた装丁家にお願ひしました」というメールがあり、自身も期待が膨らんだ。その頃から私は近年の出版界の動向に興味を持つようになった。



オンライン書店のAmazonでは、1時間ごとに販売ランキングが出る(移動平均と思われる)。Amazon自体の販売量は大きくはないが、広告、宣伝の効果を知るには便利である。ちなみに本書の広告が全国新聞に載ったある日曜日は、朝頃は数万台であったランキングが昼過ぎには500番あたりにも急上昇し、その後一週間は数千台をキープした。販売数に大きく寄与するのは今でも書店での売り上げだ。出版社は書店(特に大手)との関係を大事にし、店頭が目立つところに平積みしてもらうことをめざす。かつては、書店ごとある意味独自路線があり目利き店員も多くいたが、最近はどこも売れ筋本のみを重宝し、これといって知識のない店員もいる。近年、出版業界全体として販売部数が落ち込んでいる。この背景には、若者が本を読まなくなったこと、iPad等のIT端末を使った電子書籍の普及があるという。販売部数減は出版社や書店の経営を直撃し、いわゆる悪貨が良貨を駆逐する現象が起きている。ゆゆしき事態だ。「iPadを捨て書店に行き、自分の目で読むべき本を探そう!」と言いたくなる(おそらく本書を出したせいであろう)。先日、取材に来た雑誌社や新聞社の記者も既存のマスメディアの危機を語っていた。電子書籍、電子新聞などインターネットを利用した情報化は、私たちにどんな未来をもたらすのだろうか。長い文章を繰り返し読んで理解力や思考力を鍛えたり、社説などで時事問題に啓発されたり、そうしたことも果たして期待できるのであろうか。『アマゾン、アップルが日本を蝕(むしば)む』(PHPビジネス新書)はネット帝国主義に対して警鐘を鳴らしている。

研究所では節電に取り組んでいます



随想 宮沢賢治の二作品

副所長 高橋龍太郎

とてつもない地震が起こった。この文をしたためている今日は三日目である。私の出身地の宮城県、大好きな岩手県がともに大きな被害を受け、悲しいことに犠牲者の数はこれからも増えそうである。今から20年前、両県の山間地の医療機関で都合三年間働いたことがある。最初に行った岩手県（沢内村、現西和賀町）を選んだのには訳があった。私の最も敬愛する宮沢賢治と柳田國男ゆかりの場所だったからである（「遠野物語」を書いた柳田國男の生まれは岩手県ではなく兵庫県福崎町である。つい先日、播但線で姫路に向かうときこの町を通った）。

宮沢賢治の作品のひとつに「グスコブドリの伝記」がある。主人公のブドリは、冷害や火山噴火に悩む農民の窮乏を何とかしようとして、クーボー博士に相談したのち自分が犠牲になることを決意し、火山の爆発を利用して人工的に気候温暖化を実現させるのである。科学知識に長けた宮沢賢治らしい童話であり、善人が生き残る単純な大衆受け狙いではない。現在でも岩手県はたびたび冷夏の被害を受けており、私がいた頃も秋になっても首を垂れない稲穂がむなしく広がっていた。地球温暖化といっても地域によっては冷害や雪害は大問題である。まして地震、津波となるととても厄介である。私は、この童話を倫理的な自己犠牲の物語などとしてではなく、自然の営みと人間の営みが混ざり合う地点を描いた話として読んだ。そして、その地点を理解することは子供たちにとって大切なのだと思う。

もうひとつの作品、「注文の多い料理店」についてである。先月、70歳代半ばのある看護学者と食事していたとき、「葉っぱのフレディ」（レオ・バスカーリア著）が話題になった。葉っぱのフレディはある冬の日、木から離れて最期を迎える。「冬が終わると春が来て雪はとけ水になり 枯れ葉のフレディはその水にまじり 土にとけこんで 木を育てる力になるのです。」というくだりで終わる。私はこの本が好きになれない、“意図的”なところが好きになれない理由である、

とその人に言ったところ、「あなたも70歳代半ばにもなれば分かるはずよ」と反論された。ここでその再論を試みるのはフェアでないので、代わりに「注文の多い料理店」を引き合いに出したい。二人の男が山奥に猟に出かけ、空腹になったころ「山猫軒」という西洋料理店を見つけて入り、ドアに書いてある指示に次々と従っていくうち、ついに、料理を食べる店ではなく料理されて食べられてしまう店であることに気がつく話である。山でお腹を空かした人ならば誰でもやるような行動を、軽い皮肉と愉快な落ちでまとめた物語である。「葉っぱのフレディ」との違いは、私は、“説明をしない”点にあるように思う。人間の自然なアクションには、その過程で陥るかもしれない危険があると同時に、たいていの場合、危険に出会わずに済んでしまう私たちの日常というものの事実を描いている。

宮沢賢治の二つの作品は、はからずも今回の地震と津波について、犠牲者への哀悼にひとつのことを加えてくれる。人間の営みは、時に自然の営みにぶつかり、人間が生きている限りその不可能性と可能性のはざ間は消えないことを。そして、このような物語を童話として、もっともふさわしい風土のもとで書物として残した宮沢賢治を敬愛してやまない。イーハトーブは今回の地震と津波にも変わらぬ風景を再び見せてくれることを祈る。



写真左：沢内病院前で（1992年）
写真右：「注文の多い料理店」表紙



退職

神経画像研究チーム研究部長	石渡 喜一	(3月31日付定年退職) 4月1日付シニアスタッフ健康長寿医療センター (研究所)
老化制御研究チーム	本田 修二	(3月31日付定年退職) 4月1日付シニアスタッフ健康長寿医療センター (研究所)
老化制御研究チーム	野本 茂樹	(3月31日付定年退職) 4月1日付シニアスタッフ健康長寿医療センター (研究所)
老年病理学研究チーム	仲村 賢一	(3月31日付定年退職) 4月1日付シニアスタッフ健康長寿医療センター (研究所)
老年病理学研究チーム	下村 七生貴	(3月31日付定年退職) 4月1日付シニアスタッフ健康長寿医療センター (研究所)
主任 (事業支援係)	柳川 秀雄	(3月31日付定年退職) 4月1日付再任用板橋ナーシングホーム

採用

福祉と生活ケア研究チーム研究部長	石崎 達郎	任期付固有職員 (研究部長)
老化制御研究チーム研究副部長	石神 昭人	任期付固有職員 (研究副部長)
福祉と生活ケア研究チーム	小島 基永	任期付固有職員
自立促進と介護予防研究チーム	宇良 千秋	任期付固有職員
自立促進と介護予防研究チーム	金 美芝	任期付固有職員
経営企画局事業推進課長	河本 英二	新規採用 (課長)
経営企画局事業推進課	井出 ひろ美	新規採用
経営企画局事業推進課	戸井田 菜穂	新規採用

異動(転出)

事業推進課長	諸星 岳仁	多摩府中保健所
主事 (事業支援係)	宇野 弘	健康長寿医療センター総務課総務係

平成 23 年度科学技術週間参加行事

科学技術週間 (発明の日 4月18日を含む一週間) とは、文部科学省が科学技術の普及啓発活動の一環として、昭和35年から行っているものです。この期間中に、全国各地で科学技術に関するイベントが開催され、東京都においても例年、施設公開や講演会などの行事を開催しています。

東日本大震災の影響のため、例年実施している特別行事及び各種施設公開の一部は中止されましたが、当研究所では、予定通り、4月20日(水)に実施しました。今年度は、板橋区立文化会館小ホールにおいて講演を、その後研究所に移動して各研究室等の見学を行いました。

講演では「謎の長寿ビタミンを求めて～モデル動物線虫を使った老化抑制物質の探索～」と題して老化制御研究チームの本田陽子研究員(写真)から、線虫と

いう、寿命が3週間と短い実験動物を用いての老化遅延物質の探索研究についてのお話がありました。

講演終了後にはポジトロン医学研究施設など、6コースに分かれて研究所見学を行い、参加者の皆様に研究所の素顔を見ていただきました。

また、これと並行してミニ講演「放射能を理解する」と題して、研究所で放射性物質を扱う2人の研究員による講演を行いました。今回の大震災に伴う福島原発事故について様々な情報が流され、多くの理解と誤解が混在している現状の中で、放射能の正しい理解に向けて、放射能と放射線の違いや私達が日常的に受けている被爆とはどのようなものがあるかなどのお話でした。



新チームリーダー、サブリーダーの紹介

福祉と生活ケア研究チーム チームリーダー（研究部長）

石崎 達郎

私は平成8年秋から4年間、“老人研”の旧疫学部門で研究員として勤務させていただいた経験があります。その後、平成12年秋から京都大学の公衆衛生大学院で教育・研究に従事し、この3月までは“老人研”の非常勤研究員を勤めさせていただきました。今回、約10年ぶりに“老人研”で勤務させていただくことは、たいへん光栄であると同時に身の引き締まる思いです。

私の専門は公衆衛生学ですが、中でも特に「加齢の疫学研究」と「ヘルスサービス研究」を専門としています。“老人研”のいちばんの魅力は、高度な学際性にあると感じています。これまで15年弱の間、内外から“老人研”を観察してきました。老年学研究を深めるほど、“老人研”には卓越した「総合的研究力」が備わっていると実感しています。高齢者の医療・介護・健康増進に係る制度運用やサービス利用・費用等を分析し、より良いサービス提供につなげる「ヘルスサービス研究」の遂行には、高齢者を取りまく現状を的確に把握できる観察力と共に、多彩なバックグラウンドを有する研究者の協力が欠かせないと思っています。皆様、今後とも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



老化制御研究チーム（分子老化制御）サブリーダー（研究副部長）

石神 昭人

私は平成6年1月から平成20年3月までの14年間、地方独立行政法人化して東京都健康長寿医療センター研究所になる前の東京都老人総合研究所で研究員、主任研究員として老化研究を行ってきました。そして、平成20年4月から平成23年3月までの3年間は東邦大学薬学部で准教授として薬学教育及び研究活動を行ってきました。この間、日本の薬学部では従来の大学4年制課程から新しく6年制課程への移行という大転換期にあり、教員の教育負担が大きくなり、ほとんど研究活動を行えない状況でした。しかし、研究をあまり行えなかったからこそ、自分が何をすべきか、もう一度考え直す良い時期でもありました。そして、私は大学院生の時から27年間取り組んだ老化研究をライフワークとし、今後は社会や人のためになる有益な老化研究に取り組んでいくことを決めました。特に、老化の複雑な分子機構を解明すると共に老化のスピードを遅らせる老化制御を主要な研究テーマとして掲げ、研究を行っていきたいと考えています。研究成果を少しでも早く社会に還元できるようにこれから鋭意努力していきますので、よろしくお願い致します。



去る3月11日の東日本大震災で亡くなられた方々に哀悼の意を表すると共に、被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。

ここ東京都健康長寿医療センター研究所では幸いに人的被害はなく、建物に多少の被害を見たり、書籍や実験器具が落下する程度の被害でしたが、ただ一つ、天井裏を走る温水パイプが破損して、数室にわたって天井から大量の温水が降り注ぎ、更に階下にまで漏れ出したのが最大の被害でした。事務方を始め数十人が、実験器具、書籍、パソコン等の運び出しや、大量の温水の排水に、数時間にわたって従事し、なかでも設備担当職員は深夜まで作業が続きまして。少なからぬ帰宅困難者の中には、研究所で仮眠した者あり、また数時間かけて徒歩で帰宅した結果、翌日マメや筋肉痛に悲鳴を上げた者もありました。

研究所からは、震災直後から栗田研究部長が仙台入りし、医師として被災者支援に当たったほか、村山研究部長が東北大学の加齢医学研究所の支援に当たりました。また共同研究先の相馬市など各地へ足を向けたり、前任地での知り合いを失い心を痛める研究員もあり、それぞれに震災を重く受け止めています。

研究所では目下、震災被災者支援に向けてホームページの開設準備中です。

老年学公開講座 次回の予定

※手話通訳を同時に行います。事前申込みは不要です。

入場無料
事前申込不要
当日先着順
1400名

講演：「介護予防と認知症予防のABC」

日時：平成23年7月8日(金)
午後1時15分～4時30分

会場：練馬文化センター大ホール(こぶしホール)
(当日先着1400人・申込不要)

最寄り駅：西武池袋線・西武有楽町線・都営地下鉄大江戸線
練馬駅北口徒歩1分

主催：地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター 研究所(東京都老人総合研究所)
後援：練馬区(予定)

主なマスコミ報道

H.23.01 ~ H.23.05

自立促進と介護予防研究チーム 研究副部長 金 憲経
●「高齢者の健康維持のための方法」
(読売新聞 H.23.01.03)

自立促進と介護予防研究チーム 研究部長 栗田主一
●「介護社会：女性 孤立前に自衛を」
(東京新聞 H.23.3.26)

副所長 高橋龍太郎
●「ルネッサンス計画でストック再生への取り組み
—温度差解消に工夫—」
(ガスエネルギー新聞 H.23.3.24)
●「高齢期における「社会性の変化」について」
(「高齢者世代の住空間研究」 H.23.3.31)

社会参加と地域保健研究チーム 研究部長 新開省二
●「高齢者のべ5000人「10年間」追跡調査でわかった
「粗食」は早死にする！」
(週刊文春 H.23.3.24)
●「後悔しない治療「健康長寿 一年とったら
”粗食”より肉だ、脂肪だ」
(日刊ゲンダイ H.23.4.28)

●「ラジオ人間ドック 近著『50歳を過ぎたら「粗食」
はやめなさい!』(草思社刊)の内容紹介」
(ニッポン放送 高嶋ひでたけのあさラジ! H.23.5.9
～13の毎日)

老化制御研究チーム 研究員 近藤嘉高
●「ポテトチップスでビタミンC取ろう」
(共同通信による報知新聞等全国の新聞各紙への配信
H.23.3.28)

社会参加と地域保健研究チーム 研究部長 藤原佳典
●「はつらつ絵本読み聞かせ—子どもと交流 生活にはり」
(読売新聞 H.23.4.29)

老化制御研究チーム 研究部長 田中雅嗣
●「救命病棟 女医24時」
(テレビ朝日 医学監修) (H.23.5.2)

編集 後集 記

東日本大震災により尊い「いのち」を奪われた方々のご遺族の皆様に対し、深くお悔やみを申し上げますとともに、被災地の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

阪神・淡路大震災の時はまだ介護保険が施行される前だったので、要介護高齢者を把握しにくいという問題がありました。新潟県中越地震は介護保険施行後で、要介護認定者名簿が整備されていましたが、個人情報保護により安否確認のための情報提供が遅れるケースが見受けられました。そして今回、特に津波の被災地域では介護施設や職員も被災したため、介護サービスの提供が途絶える事態が起きています。他地域の介護・医療施設での受け入れや仮設住宅に介護施設を併設する等の対応が図られつつありますが、震災の度に要介護高齢者への対応について問題をつきつけられ、深く考えさせられます。

被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

(沈丁花)



平成23年5月発行
編集・発行：地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター 研究所(東京都老人総合研究所) 広報委員会
〒173-0015 板橋区栄町35-2 Tel. 03-3964-3241 (内線3151) Fax. 03-3579-4776
印刷：コロニー印刷
ホームページアドレス：<http://www.tmig.or.jp> 無断複写・転載を禁ずる